関西学院のキャンパスを設計した「建築家」ヴォーリズ

関西学院大学建築学部准教授・建築学部ヴォーリズ研究センター研究員　石榑　督和

日本各地でフィールドワークをしていると、関西学院の卒業生に出会うことがあって嬉しい。先日は沖縄で古写真を見ながら戦後にできた市場について話してくださっていた方が卒業生だとわかって、話題は那覇の戦後から1970年代の西宮北口へと時空間を飛んで展開した。

卒業生のみなさんと話していると「Mastery for Service」というスクールモットーだけでなく、しばしばキャンパスを設計した「ヴォーリズ」の名前が出ることに驚く。戦後の学制改革とマンモス化を経て多くの私立大学がキャンパスの性格を変えてきたにも関わらず、関西学院は上ケ原移転時からのキャンパスの特徴が引き継がれ、卒業生にも広く浸透している。他の学校ではなかなかないことだろう。

関西学院のキャンパスを設計した「建築家」ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）は20世紀はじめから1960年代まで、関西を中心に活躍した。私は、2022年に建築学部に設置されたヴォーリズ研究センターの研究員としてヴォーリズに関わる研究をはじめた。関西学院大学博物館で9月末からはじまっている展覧会「天を見あげて―関西学院のヴォーリズ建築―」では、戦中期に金属供出で撤去された時計台の手すりのアイアンワーク（金属製の装飾）を木製模型で復元し展示している（写真）。

大理石と人造石でつくられた時計台の手すりにポカンと空いた穴。復元模型制作の過程で、手すりに装飾があるかないかは、階段周りの性格を大きく変えることを実感した。建物とそれを使う人間の身体は大きさが異なるが、その間をつなぐのが建物に施された装飾だ。穴の空いたそっけない階段は、復元模型が入ることによって身近なものへと変化する。展覧会の会期中、みなさんにも模型設置前の手すりを思い出しながら、時計台の階段を登ってもらいたい。

ところで20世紀の日本でモダニストとして活躍した建築家たちは、乱暴にいえば独立した個人として作品を構想し建築をつくるロマン主義的な主体としてとらえられてきた。ヴォーリズが活躍した時代、日本国内でも徐々に装飾を廃した近代建築が登場し始めた時期であるが、ヴォーリズは装飾をもった様式建築をつくり続けた。ヴォーリズの設計した建物を見ていくと古典的な建築の規範を形にすることが主題というより、必要とされる建物のために過去の様式を適用することでクライアントの要望を形にし、安定した魅力的な環境をつくることに力を注いでいた。

今年の夏、関西学院同窓会滋賀県支部のみなさんが近江八幡のヴォーリズ学園を会場に企画されたイベントで「ヴォーリズ建築」について講演をする機会を得た。よく知られている通り、ヴォーリズは建築設計以外にも多くの社会的な活動・事業を行なっていた。その拠点が近江八幡であった。講演会に参加いただいたみなさんと話すうちに、私はヴォーリズを「建築家」と呼ぶのは適切ではないかもしれない、と思うようになった。先に述べたようなロマン主義的な主体としての「建築家」という言葉では、ヴォーリズの仕事を矮小化してしまう。21世紀の日本に生きる私たちは建築家の職能や、建築の定義が急激に変わってきたことを知っている。建物を作品としてつくることだけが建築家の仕事ではなくなった。広く社会と関係性を持ち、建築設計以外でも世界をつくっていく職能へと建築家は変わってきた。ヴォーリズの仕事はモダニスト的な「建築家」ではなく、現代的な建築家像に重なる。今こそ、ヴォーリズの仕事を再読していきたい。

今回の展覧会「天を見あげて―関西学院のヴォーリズ建築―」のために倉田麻里絵学芸員を中心に行われた調査では、関西学院に建てられたヴォーリズ建築の総体を記録した資料がないことがわかった。また戦中期の金属供出で失われたままになっているアイアンワークがキャンパスにはいくつもある。関西学院とヴォーリズをテーマとする研究と復元の可能性は、まだまだ広がっている。

（いしぐれ　まさかず）

アイアンワークの復元模型のある時計台の手すり